

◆連載-Vol.9

# 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)  
1948 神奈川県生まれ。1971年  
千葉大学建築学科卒業、「住宅  
特集」「新建築」編集長を経て  
1994年からフリー編集者。  
1999年～2014年千葉大学客  
員教授。木の建築フォーラム理事、  
日本建築学会建築文化事業委員  
会幹事

## モダニズム建築の揺籃期 その1

第一次大戦後の廃墟からの復興は、新しい世界の建設を促すはずだった。しかし、まだまだヨーロッパ社会はモダニズム建築を受け入れてはいなかったし、19世紀までの長く重い尻尾を引き摺っていた。

だからこの時期はモダニズム建築の揺籃期と言うべきか、あるいは様式建築の断末魔の叫びが木霊した時代と言うべきだろうか。そのいくつかを拾って概観してみよう。

### イタリア グルッポ・セッテ —— モダニズム本来の姿

まず、今日においても重要な意味を持つと思われるのがイタリア。ここでは第一次大戦以前から「未来派」と呼ばれる芸術運動が起こっていた。アール・ヌーボーと時期的には近いが決定的に違うのは、過去の芸術の徹底的な破壊と機械文明の全面的な肯定を標榜したことであり、その暴力性ゆえか、未来派の一部はファシズムに走った。

思想的な意味はともかく、未来派建築家の代表ともいべきアントニオ・サンテリアが描く建築像は様式的であり、権威主義や威圧感を感じてしまうものだ。

その未来派の流れを汲んで1926年、7人のイタリアの若手建築家が集まってグルッポ・セッテ (Gruppo Sette) を結成、翌27年にモンツァのビエンナーレに参加して一躍その名を知られるようになった。

中心的な役割を果たしたのはアダルベルト・リベラとジュセッペ・テラーニで、イタリアの初期モダニズム建築の旗手として知られているが、それ以上にこのふたりは真にイタリア的な建築家であり、本来の意味での「現代建築」の先駆者だと私は考えている。

思想的にはサンテリアの流れを汲んではいるものの、建築的表現としてはさらに過激になり、様式性や装飾性を見事なまでに排除した。面白いことに、それが現代建築に親しんだ私たちにはほとんど違和感がなく、すんなりと受け入れられてしまうのだから何とも皮肉である。時代的にはモダニズムの黎明期であり、表面的なデザインにおいてはその路線にありながら、思想的な背景は異なっていたにも関わらずである。

テラーニの代表作ともいえる「カサ・デル・ファッショ」を今から25年以上も前にツアーの視察対象に組み込んだのは講師のはずだった北川原温。ミラノから北へ車で1時間弱、イタリアの高級リゾート地として知られるコモ湖畔から歩いて数分、トラムがドゥオモとの間を走っていた。外観は幾何学的で端正。外壁は白い大理石張りで太陽の光を強く反射していた。背後にはなだらかな山稜が見えて、なんとも静かな雰囲気の中で輝いていた。

しかし、簡単には入れなかった。当時は国境警備隊の詰所で、機関銃を持った警備隊員が見張っていた。何とか許可をもらって吹抜けの中に立ったとき、同行した建築家からいきなり質問を受けた。「この建物、どこがいいの?」どうやらインパクトが薄かったようだ。

おそらく私より北川原のほうが見たかったに違いない。事情があって北川原が参加できなくなってしまったから「講師のはずだった」と書いた。本来は同行講師が答えるべきことを、にわか代理講師の私が答えなければならなくなった。そこで改めて考えた。美しいとか輝いているなどの印象的な言葉では済まない。いったい何がいいんだろうか。

以下はその場で、苦し紛れに考え出した理由である。「イタリアの伝統的な建築、それはとりもなおさず教会ですが、それはどのような空間をつくってきたのでしょうか。キ

リスト教の教義にある天と地、神と人などの関係性を垂直性に置き換え、それを建築に与えて表現したのです。ミラノのドゥオモの尖塔ゴシックは、より神に近づくためのデザインでした。ところが15世紀ごろにドームを得意とした建築家、フィリッポ・ブルネッレスキがドームは無限の広がりを示すという解釈をしたため、その後の教会はほとんどがドーム天井になりました。表現形式は変わろうとも、あくまでも空間や建築自体の垂直性こそ重要なテーマだったのです。

さて、このカサ・デル・ファッショですが、外観はまさにモダニズムそのもの、装飾など何ひとつありませんし、どちらかというと水平性が強調されているように見えます。しかし、建物中心のこの吹抜けを見上げてください。天井はガラスブロックですよ。かなりリスクーだと思いませんか。1936年の建設技術で雨漏りは大丈夫でしょうかね。でも、そのリスクを冒してまで天井にガラスブロックを用いたのは、上からの光に垂直性を託したのですよ。形式的にはモダニズムの言語を用いながらも、イタリア建築が歴史的に追い求め続けてきた垂直の空間性が光によって表現されているのです。」

よくもまあ出まかせが…、そう言いながら自分でも気が付いた。これまでに見たグルッポ・セッテのメンバーが設計した建物には、これでもかというほどにトップライトやハイサイドライトが多用されていたのだ。リベラが設計したアヴェンティノーの郵便局などは、こんなに明るさが必要なのかというくらい大袈裟だ。E.U.R.の会議場の内部は劇的というくらい効果的。またグルッポ・セッテの一員、ジュセッペ・ヴァッカーロがナポリに設計した郵便局ではエントランスホールの吹抜けに沿って、GLから天井まで高く垂直なサイドライトがとられていた。

なお、E.U.R.についてはもう少し説明したい。1942年に予定されていたローマ万博のため、ローマの郊外に計画され

た新都市だが、第二次世界大戦の勃発によって万博は流れてしまい、遺跡(?)が残った。いまでは普通の都市になっているようだが、私が訪れたのは1975年。まだ都市としては未完成な印象が強かったが、逆にそれが乾いた空間の印象を与えてくれた。まるでジョルジオ・デ・キリコが描く絵のように、時間は止まり、音も聞こえず、まるで凍りついたような不思議な魅力に惹き込まれた。

この私見が正しいかどうかの判断は読者諸賢にお任せするが、コモにはリベラ財団があって、理事長にお会いする機会があった。タカビーな婆さんだったが、その時に同じ話をしてみた。果たして的外れかどうか、心配になったのだ。タカビーな婆さんがいきなり優しい老貴婦人に変身し、満面の笑みをたたえながら「その通り」と答えてくれた時には心底ホッとした。驚いたことに理事長はテラーニの姪だったので、オレの読みは間違っていなかったと、余計な自信まで持ってしまった。

イタリアはモダンデザインの本場だと言い切っても、誰も反対しないだろう。私たちは眼前にあるデザイン自体に魅了されてしまう。ところが、そのデザインの根底には歴史が、大げさに言えばローマ時代からの歴史が潜んでいるのだ。長い歴史との葛藤の末に、今日のモダンデザインが生み出されているということを忘れてはいけない。

リベラについて言えば、カプリ島のマリンプルーの地中海を望む絶景の断崖の上に立つ「カサ・マラルバルテ」が有名だ。幸いなことに、私はマラルバルテ一族の末裔にご案内いただいた。赤いテラコッタタイルの屋上にも上げてもらった。

この屋上はジャン=リュック・ゴダール監督、ブリジット・バルドー主演の映画「軽蔑」(1963)の舞台にもなった。そして磯崎新も著書『栖12』で採り上げていたので一読をお勧めしたい。(続く)



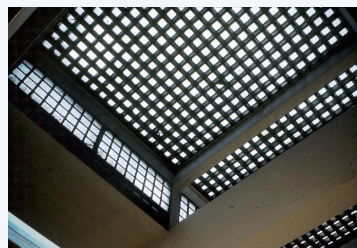
コモ湖の風景。イタリアでは高級リゾート地で、背後に遠くアルプスを望む



カサデルファッショ 正面全景



カサデルファッショ 1階ホール



カサデルファッショ 天井のトップライト。ガラスブロックの上に透明ガラスが架けられている



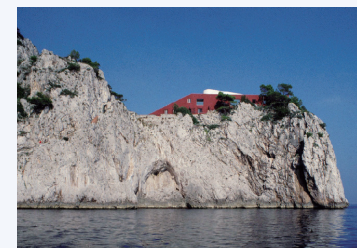
E.U.R.の議場。頂部の緩やかなヴォールトの妻側から採光されている



郵便局のホール。ハイサイドライトがステンレスに反射する



G.ヴァッカーロのナポリ郵便局は階段室全体がスリットになって採光されている



カサ・マラルバルテを専用のポートから見る